

献呈の辞（山崎亮先生）

本号は、2024年3月末日をもって、定年により退職される山崎亮先生の退職記念号となります。

山崎先生は、教育学部—法文学部—人間科学部、と3つの学部を渡り歩いてきた福祉社会教室・コースの運営に尽力されました。以下、福祉社会教室における山崎先生のご活躍について、いくつか紹介させていただきます。

山崎先生は、1995年4月、島根大学教育学部社会科教育研究室に赴任されました。同年1月17日には、阪神・淡路大震災があり、交通網も復旧していない中、宮城県からの来松にはご苦労されたと伺いました。また、3月には、オウム真理教による地下鉄サリン事件も発生し、社会全体が騒然とした中での赴任であったと想像します。後に、「オウム真理教事件と宗教学—地下鉄サリン事件の10年後に一」という論文を発表されるように、先生は宗教学をご専門とされてきました。もとより、門外漢の私にとって、先生の研究の全体像をここで述べることはできません。その役は、本号の諸岡先生による達文に委ねることにします。

ただ、社会福祉学を専門とする身からすれば、山崎先生が、宗教学の立場から福祉学領域に寄せて書かれた論考に、大いに刺激を受けました。「脳死・臓器移植」「死」「青い芝の会（障害者自立運動）」といったテーマの諸論考がそれにあたります。論文は、引用部分自体が面白く（大仏空や横塚晃一のテキスト等）、史・資料批判も鋭く、結論部分は古今東西（正に、記紀の時代から現代まで。またフランスの話から島根県の神社の話まで）の知見を取り入れた論が展開されていて、と楽しく読ませていただきました。また、いくつかの論文を、本誌と前身の『福祉文化』に投稿されました。これら紀要が2001年以来、20年を超えて刊行できているのも、先生の時々の励ましのおかげと思ひ、引き継いでいきたいと思ひます。

先生は、こうした研究テーマを、ゼミ生と一緒に楽しんでいたという印象があります。ゼミ生の卒論をみていると、各自が興味のある本を、苦労しつつも先生の伴走で一生懸命に読んでいたことが伺えました。やや余談ですが、卒論報告会の際、学生のレジュメの細部まで指導されるのを拝見し、先生の研究に対する姿勢の一端が窺えた気がしました。同時に、なぜか、ユーモラスな趣もあり、ほのぼのとした気持ちにもなりました。

山崎先生には、学部・教室運営の面でも、大きな役割を果たしていただきました。法文学部、人間科学部の双方で入試委員長を務められました。人間科学部の発足時には、教育担当の副学部長とされました。これらのお仕事を拝見していて、作業の緻密さ、文章の正確さ、制度の正確な理解、周囲の人への目配り気配り、といったことに、感嘆しました（これは多くの方が同意して下さると思ひます）。教室運営についても、コースが3学部を移動する過程で、存続の危機をはじめ、度々困難な状況に陥りました。その際、山崎先生のお知恵とアイデアが、難しい局面を切り拓く場面を何度も見ました。

このように「大黒柱」ともいふべき先生がご退職なさることになり、私たちも寂しさを感じざるを得ません。とは言え、山崎先生が無事に長年のお勤めを終えられることをお祝い申し上げ、感謝の意を込めて本号を捧げます。

2024年3月
福祉社会教室主任 加川充浩

献呈の辞（杉崎千洋先生）

本号を、2024年3月末をもって退職される杉崎千洋先生に感謝の意とともに捧げます。

杉崎先生は、1999年4月、島根大学教育学部社会科教育研究室に赴任されました。

同年から、教育学部に、社会福祉士国家資格受験資格を取得できる福祉社会コースが創設されることになり、社会福祉学を専門とする教員として、着任されました。（今の社会福祉士養成カリキュラムからは考えられないことですが）当時、福祉学の専任教員は2人でした。私も2004年に着任しましたが、数年は、杉崎先生と一緒に「福祉教員2人体制」ということが続きました。振り返っても、どうやってカリキュラムを維持していたのか、不思議な気がします。もちろん、コース運営については、立ち上げのときから尽力された、国語教育研究室と社会科教育研究室の先生方のお力が大きかったと確信しています。ただ、現在のタイトな養成カリキュラムのことを思うと、当時の牧歌的な雰囲気の中、杉崎先生と過ごしたことを懐かしく感じます。

杉崎先生のご専門は、医療福祉、または医療ソーシャルワークです。先生は、医療ソーシャルワーク研究の泰斗であった児島美都子先生のもとで学ばれました。当初の研究では、東海地方の病院などをフィールドとされつつ、島根に来られた後は、この地域に根付いた研究活動を展開されました。先生の研究は、地域の福祉実践を丁寧に観察する実証的研究と言えるものでした。その成果は、『医療制度改革と地域ケア 急性期病院から慢性期病院、そして地域・在宅へ』（光生館、2009年）、『単身高齢者の見守りと医療をつなぐ地域包括ケア 先進事例からみる支援とネットワーク』（中央法規、2020年）といった書籍として結実しています。この2冊は、杉崎先生が責任者として編集されました。いずれも、20名以上の執筆者があります。先生の研究を組織化する力には大きなものがありました。また、私も執筆させていただきましたが、付随して、研究会や飲み会に参加する機会も頂戴しました。その際、先生が、医療、介護、地域といった現場で活動する人々に慕われていることが、よく分かりました。福祉現場とそこで働く人たちを大事にされていたのだと思います。さらに、先生が設定される研究テーマが、現場の人に支持され、課題解決を求める専門職が集ってきていることも感じ取ることができました。

杉崎ゼミの卒業生は、現在でも多くが福祉現場で仕事をしています。山陰地域の医療機関・福祉施設において、医療ソーシャルワーカーを始め、様々な職種に就いています（私も病院受診中に卒業生に声を掛けられたことが度々あります）。そうした卒業生たちが、先生の研究室を訪ねてくる様子も拝見してきました。卒業生も、杉崎先生のちょっと辛口な（?）、けれども、うそや変な飾りのない会話のやり取りを楽しんでいるように見えました。このように、25年間にわたり、学生教育に尽力され、多くの医療・福祉の担い手を育成されました。これは、福祉社会コースの地域社会からの評価を高めることにもつながったと思います。

杉崎先生には教育学部でのコース開設以来、福祉プロパーの年長者として、研究、教育、コース運営を牽引いただきました。ご体調が万全でない時期もあり、いろいろとご苦労をおかけしたこともあったと思います。ご退職後は、無理をなさらず、健康第一でお過ごし下さい。長い間、本当にありがとうございました。

2024年3月
福祉社会教室主任 加川充浩